

(公社) 高知県自治研究センターセミナー

# リベラル保守 という可能性

〜アジアの連帯に向けて〜

講師 **中島岳志**

東京工業大学リベラルアーツ研究教育院教授  
著書『リベラル保守』宣言『アジア主義』他



2020 1.22 水

三翠園 高知市鷹匠町1丁目3-35

# (公社) 高知県自治研究センターセミナー

---

**司会** 定刻になりましたのでセミナーを始めていきたいと思います。今日は、「リベラル保守という可能性」ということで、東京工業大学リベラルアーツ研究教育院教授の中島岳志さんにおいでいただきました。

冒頭に若干申し上げますと、安倍政権が8年目に入りまして、特にその外交、アジア関係で言えば、やってる感というのは非常にあるわけですが、じゃあ実際うまくいっているのかというと、大変疑問も感じざるを得ないわけですし、内向きのアメリカと、一方で台頭してくる中国という二つの大国のはざままで翻弄されているような印象もあります。特にそのアメリカが、国力が衰えて内向きになって、そのツケを全て日本に押し付けようとしてくる中で、それに対抗するためにはやはりアジアでの日本の位置というのがしっかりしておかないといけないと思うんですけども、アジア、特に極東地域の関係をみてみますと、中国でいえば圧倒的なパワーに押されてもう対抗できないような状態になり、日韓関係はご案内のとおり史上最悪の関係。日朝関係はもう蚊帳の外であって、日露も頻りに首脳同士は会っているのにお金だけ取られているというような、そういった印象があるわけですね。そもそもは第2次世界大戦後の清算をきちんとしていないということも原因としてあるわけですが、今のこの2000年代も半ばに入ろうとしている時代に、改めてそういった世界の中での日本の立ち位置、特にアジアでの関係をどういうふうに見たいのか、考えたいのかということで今日のセミナーを開催したところです。

中島教授のご略歴を簡単に申し上げますと、1975年に大阪市でお生まれになって、現在、東京工業大学でリベラルアーツ研究教育院の教授を務めておいでです。著書には『リベラル保守宣言』、『アジア主義』等の著書がございまして「週刊金曜日」の編集委員等も務めておられます。

それでは中島教授、早速ですがよろしく願いいたします。

# リベラル保守という可能性

## ～アジアの連帯に向けて～

中島 岳志 氏

(東京工業大学リベラルアーツ研究教育院教授)



1975年、大阪生まれ。京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程修了。学術博士（地域研究）。2005年『中村屋のボース』で、大仏次郎論壇賞、アジア太平洋賞大賞を受賞。北海道大学大学院准教授を経て、現在、東京工業大学リベラルアーツ研究教育院教授。著書に『ナショナリズムと宗教』、『秋葉原事件』、『「リベラル保守」宣言』、『血盟団事件』、『岩波茂雄』、『アジア主義』、『親鸞と日本主義』、『保守と立憲』、『超国家主義』、『自民党』などがある。

こんにちは、東京工業大学の中島と申します。今、ご紹介をいただきまして、また今回お招きいただきましてありがとうございます。私は実は、高知とはいくつかのご縁がありまして、これでもう10回目ぐらいになると思いますが、数ヵ月前にも来させていただきました。よく講演に呼んでいただいたり、また、私自身の研究等に関しても、高知という所には深くこれまで関わってまいりました。先ほど『アジア主義』という本を書いたということをご紹介いただきましたが、私の研究テーマの主な一つは、戦前の、いわゆる国家主義運動とは一体何だったのかということなんです。現代における宗教やナショナリズムという人間の精神とか心の問題というのが、政治とどういう関係性を持っているのかということが私の大きな研究のテーマです。その時に、戦前の超国家主義思想とは一体どういうものだったのか。その原点に「玄洋社」という、これは福岡で生まれた頭山満という人が中心になって作った日本の右翼団体のはしりであり、中核でもあった団体があります。

この「玄洋社」は自由民権運動の結社として、福

岡県で生まれた団体です。そして、板垣退助と非常に密着し連帯を取った団体でありました。なぜに自由民権運動の中から日本の右派、超国家主義というのが生まれてきたのかというのが、私の非常に大きなテーマでした。そういったことから高知にも、例えば私は馬場辰猪という人を大変尊敬していますが、ここからすぐ近くですね、お生まれになった所は。私はフィラデルフィアのお墓にも以前行ったことがありますけど、馬場辰猪とか、あるいは中江兆民とか、そういった思想家を生み出したこの高知に関して、これまでも様々な調べものとかをさせていただいたりしました。一番びっくりしたのは筆山に登った時でして、革靴を履いて、スーツを着た格好でタクシーの運転手に、「筆山に行ってください」と言うと、「お客さん、その格好で本当に登るんですか」って言うので、僕は簡単な小さな山のような場所にお墓があるんだろうと思っていたのですが、登り始めると、あれ大変ですよ。ハイキング以上のコースですね。スーツ着て、へとへとになりながら山登りをした記憶がありますけど、その時に私が探していたのは、楠瀬喜多のお墓なんです。民

権ばあさんと言われた楠瀬喜多のお墓を探しまして、何でそのお墓をどうしても見たかったのかというと、そのお墓を立てたのが頭山満なんですね。頭山満の名前が彫られているということで、そのお墓を一生懸命探しに行ったことがありました。まあ、そういったことで、私にとっては、ご縁のある高知で、こういうふうにお招きをいただきまして、大変光栄に思っております。

## ～日本政治のマトリクス図～

### 配分と価値を軸にした4つの分類

今日は「リベラル保守という可能性ーアジアの連帯に向けて」ということで、1時間半ほどお時間をいただくことになりました。皆様のお手元にレジュメがあるかと思いますが、少し現在の政治の話から、そしてアジアの問題へと順番にお話をさせていただければと思っています。

レジュメのまず0番のところを見ていただけますでしょうか。政治のマトリクスと書いてあるところです。私は大学では、教員になってから15、6年経つんですけど、政治学を教えてまいりました。前任校は北海道大学で、今は東京工業大学にいます。政治学をずっと教えてきたんですけど、まず

最初に、政治って一体どういうことをやっているのかということをお学生に教える必要があります。その時にいつも使っているのがこの下のマトリクス図です。内政に限定をしたいと思いますが、内政面において政治家、あるいは行政というのは一体どういう仕事をやっているのか。これを大きく分けると二つあって、一つはお金の問題、もう一つは価値の問題を仕事としてやっているというのが、国内における政治の本質にあるのではないかと私は考えてきました。

このマトリクス図で、縦軸にはリスクということを書いています。これは突き詰めていくとお金の配分の問題です。そして横軸が価値の問題です。こういうふうにして、少し政治というもののマトリクスを考えてみようというのが私が政治家を分析するとき、あるいは政党を分析するときに導入している分析の仕方です。まずお金の問題から考えてみたいと思います。縦軸の方です。私たちが生きてるときさまざまなリスクに出会うことになります。例えば、あまり考えたくないですけど、今晚もしかするといきなり難病を発症して今日までの仕事が続けられなくなるといことは、これはお金持ちであろうが、そうでない人であろうが、可能性、リスクというのは万人が持っているわけです。有限な

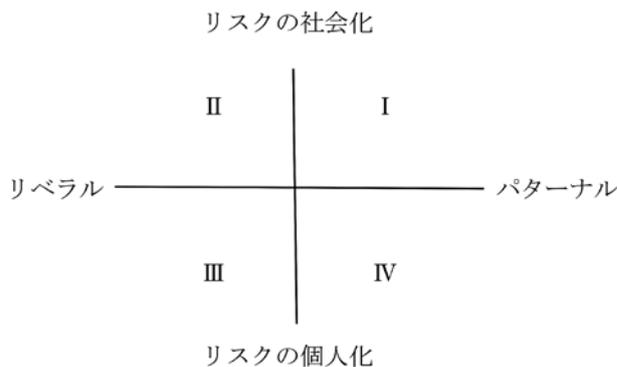
#### 0. 政治のマトリクス

##### ① 配分をめぐる軸…縦軸

→セーフティーネット強化（リスクの社会化） vs 自己責任（リスクの個人化）

##### ② 価値をめぐる軸…横軸

→リベラル vs パターナル



る命というものに制約されている人間は、常にこの生命のリスクというものを持っています。あるいは、会社が倒産するというリスクもありますし、あるいは怪我をしてしまう、交通事故に遭ってしまう、とにかくこれまで平穏だった日常の前提がガタッと崩れてしまうようなリスクというのは、私たち万人が抱えている問題なわけです。その時に、このリスクに対して国家や行政がどう対応するのかによって、リスクの個人化とリスクの社会化という考え方に私は分かれてくるんだらうと思います。

まず下の方です。リスクの個人化。このリスクの個人化というのは煎じ詰めて言えば、自己責任型の社会です。そういうようなリスクに対しては個人で対応してくださいねと、病気になったとしても、それは普段から高度医療の個人保険に入っていないからあなたが悪いんじゃないですか、そういうリスクは自分で背負ってくださいねというふうに言われる。国家とか行政がそれを補填するのではなくて、そういうリスクはあくまでも自分でやってくださいねという考え方がリスクの個人化、自己責任型社会ということになります。当然のことながら、これは税金は安いかもしれないけど、行政サービスも小さいという考え方になってきます。これが下の方ということになります。ですから、俗な言い方をしますと、これは小さな政府型の政府のあり方、政治のあり方ということになってきます。

それに対して上側の方は、リスクの社会化です。これはあらゆる人に、リスクというものは平等に降り注いでくるので、これはお互い様であると。だから社会全体でそのリスクを受け止めていきましょうという考え方です。ですから、下側の自己責任型



の社会に対して、セーフティーネット強化型の社会ということになります。税金は一定程度高いかもしれないし、どこから取るのかというのはいろんな議論があります。消費税なのか否かとか、どこからどのように取るのかは別にして、あるいは国債も含めて、その規模を大きくするという点においてはリスクの社会化という流れの中では一致しています。そして税金は高いかもしれないけれども、しかし行政サービスも厚いですよと。何かあったとしても、しっかりとみんなで補填をしようという国家行政がこのリスクの社会化という方になっていきます。ですから、大きな政府型の社会というのがこの上側の方になっていきます。

もう一つ重要なのは、リスクの社会化と書いてありますがその意味は、リスクの行政化、政治化ではありません。現代における政治の主体として、国家と共に双璧と言うか、同じくらい非常に重要な意味を持っているのが市民社会というものです。例えば地震が起きた。そしてそれに対してレスキューをして、そして復興をしていく。こういうようなプロセスにおいては、これは単に行政だけがさまざまなリスクの社会化に対応しているのではなくて、ボランティアの人たちの力というのは非常に大きな意味を現代政治においては持っていたりします。あるいは再配分の問題も、もちろん国家の規模というのは非常に大きいですが、しかし現在はクラウドファンディングのようなものが定着をしてきて、昔からの言葉にすれば寄付の領域ですね。私たちは個人においても、社会の領域に参画し、再配分にも参加をすることができます。こういうような寄付の領域というのも非常に重要なことで、これもリスクの社会化、みんなでこのリスクを補い合おうというリスクの社会化という考え方になっていきます。ですから、政府の規模、税金の取り方、税の使い方という大きなお金の問題をめぐって、その考え方の対比ができるというのがこの縦軸の方です。

一方、横軸です。横軸の方は価値の問題です。政治というのはお金の問題だけをやっているわけではありません。価値観をめぐる重要な仕事もやっています。例えば近年ですと、非常に大きな話題になっているのが選択的夫婦別姓の問題ですね。これを是

とするのか非とするのかというのは、お金の問題とは関係ないですね。それを是とするのか非とするのかという価値観の問題です。また、LGBTの人たちの権利、性的マイノリティの人たちの婚姻を認めるべきなのか否かというのも価値の問題ですし、先の戦争についての歴史認識の問題なんかについても価値の問題ですね。靖国神社に首相が行くべきか行くべきでないかというのも、お金の配分の問題とはまた違った位相の問題ということになります。この問題を考える際に対比されるのがリベラルとパターナルという考え方であるというのが、私の今日申し上げたい大きなポイントになります。よくこれが「リベラル対保守」って言われてしまうんですね。政治的な対立の図式を、「リベラル対保守」の戦いというふうに言われてしまうんですけど、これは政治学をやってきた人間から見ると明らかな間違いだと思っています。まず、リベラルの反対語は保守ではありません。思想上それは成り立たないというのが私の考え方です。リベラルの反対は、正確に記すならばパターナルという概念だということになります。このことについて、少し説明をさせていただきます。

## ～リベラルという概念の起源～

### 対概念であるパターナルとの相関

リベラルという概念はどういうものかというのと、この言葉自体は非常に古いものです。古代ギリシャの時代からあるんですけど、私たちが接している近代的な意味におけるリベラルというのが誕生したのは、ヨーロッパにおける30年戦争が大きなきっかけになりました。30年戦争というのはいつ頃の話かというのと、日本だと江戸時代の初期、1600年代です。徳川家康から家光とか、その辺りの1600年代の前半にヨーロッパは30年戦争という、30年間本当に泥沼のような長い戦争を続けていました。この戦争は非常に複雑な戦争なんですけど、その一番根幹の部分にあったのは価値観をめぐる戦いだったんです。どういう価値観だったのかというのと、これはキリスト教の内部分裂です。カトリックとプロテスタントの戦いというのが基本的に一番骨格の

部分でした。前の世紀である1500年代にルターやカルヴァンという人が出てきて、宗教改革をやり、プロテスタントという新しい流れが出てきます。それがヨーロッパに一気に広まっていったものですから、旧勢力であるカトリックとの間に運命的な衝突をみたというのがこの30年戦争でした。そして、戦争をやった結果どうなったかというのと、プロテスタント優位で戦況は続いたんですが、しかしどっちが正しいキリスト教なのかというような決着を見たわけではありません。昨年秋に、ローマ法王が日本にやってまいりました。フランチェスコという人ですけれども、この人はカトリックのトップの人です。ですから、プロテスタントがいかに優位といっても、カトリックの人がいなくなったというわけではありません。今でもなお、厳然たる勢力を、バチカンを中心に大きな力を持っています。戦争から、ヨーロッパ人は何を学んだのかというのと、価値観の問題で殺し合っても決着はつかないぞということだったんですね。30年戦争をやり、へとへとになった結果、考えの違う人を殲滅してしまって一方が勝つという状況はもはや表れないとするならば、自分とは考えが異なる他者に対して寛容になり、共生していくという方法を考えなければならない、というのがヨーロッパ人がこの戦争で学んだことでした。

そして、この時に出てきたのがリベラルという概念です。ですから、リベラルというのは元々の近代的な起源ではどういう意味として発生したかというのと、これは「寛容」ということですね。自分と異なる考え方の人に対して寛容になるという意味、トレランス（寛容さ、寛大）としてのリベラルというのが元々の近代リベラルの起源ということになります。この概念はどういう展開をしていくかというのと、自分と異なる他者、自分がこれは違うぞというふうに思っている思想信条を持った人でもその信条に対して寛容になるということが前提になりますから、当然のことながら、じゃああなたは私が考えている思想に対して介入しないでくださいね、私がそういうような宗教を信じることを、ある特定の考え方を持つことについてもその自由を保障してくださいねと、まあこういう考え方になっていくわけですか

ら、このリベラルという概念は、寛容から自由という概念として発展していくこととなります。ですから私たちは、リベラリズムという言葉に真っ先にどのような訳をあてるかという、自由主義という訳をあてるわけです。これが、ヨーロッパの啓蒙主義の時代にザーッと広がっていったリベラル自由主義の探究という問題であり、リベラルという概念の本質です。

これに対して反対語は何になるかという、それはパターンナルという概念である、ということです。パターンナルというのはどういう意味かといいますと、これは父の権と書いて父権的という訳を充てます。父権的、父の権利ですね。つまり、かつて家父長制と言われた、今だに日本でもその残像があるとは思いますが、かつての日本の社会の中では、何でもかんでも家長である父親が全てのことを決定していた。息子や妻には選択権、決定権がなかったわけです。「お前は家を継げ」と言われると、「はい」と言わなければいけない、そうでなければ勘当されてしまう。妻もさまざまな所に行ったりするような自由がなかった時代が、かなり長く日本にはありました。こういうようなのを家父長的とか、父権的とかという言い方をします。どういうことかという、個人の内面の問題に対して強い力を持っている人間が介入するという意味ですね。介入主義と言ってもいいかもしれません。強い力を持っている人間が、あなたはこうあるべきだ、こうするべきだというふうに介入をしていくというのがパターンナルという概念です。ですから、リベラルの反対はパターンナルであり、パターンナルの反対語はリベラルだと。この対になっているのが、価値の問題についてのスタンスなんだろうと思います。保守については後でご説明をさせていただきます。

ですから、先ほど申し上げたような、例えば選択的夫婦別姓の問題については当然リベラルの人たちは、それは個人の価値観の問題なんだからどういう姓を名乗るかということは個人の意思、選択に任せべきであるという考え方ですね。それに対してパターンナルは、日本人だったら同姓に決まっているだろうかと、そんなものは決まっているんだ、だから駄目だっているのが、パターンナリズムということに

なっていくわけです。LGBTの人たちの権利の問題についても、それは個人の選択の問題であるから容認するべきだというのがリベラルですけれども、パターンナルでは男女の結婚が当たり前だろ、それ以外は認めないという介入主義になっていきます。このようなことが、価値をめぐる一つの対立軸ということになります。

今言ったようなことを図にしてみると、四つのブロックが、四つの象限が出てきます。私は、あの人は右っぽいとか左っぽいというような言葉よりも、政治の本質からすれば、こういう四つの象限を作って政治や政治家・政党というものを分析していった方がより正確であり、後のビジョンはしっかりと見えてくるんじゃないのかなと考えてきました。では、こういうふうにお金の問題と価値の問題で生じる四つの分類によって、少し現在の政治というものを考えてみたいと思います。現在の安倍内閣というのは、一体このI番からIV番のどこになるかと、皆様でしたらお考えになるでしょうか。これはよく学生にも質問するんです。で、まあだいたい学生にこういう質問をすると一斉に、東工大も北大も同じでしたけど下を向くんですね。当てられないように、ということなんです、それでもマイクを持って学生のところに行って、あなた何番だと思っていると聞いて回るんですけど、大体この7年間ぐらい同じところを学生は言います。私もその通りだろうと思います。それは、IV番ですね、右斜め下の所というのが恐らく安倍内閣の特質なんだろうと思います。まず横軸は分かりやすいですね。パターンナルというのは、これはかなりはっきりしていると思います。先ほど申し上げたような、選択的夫婦別姓の問題について彼らが何か積極的に取り組むという姿勢は全くありません。あるいはLGBTの人たちの権利の問題なんかについても、安倍内閣が積極的に取り組もうとする姿勢は、ほぼ、ありません。歴史認識の問題、憲法の問題、その他のさまざまな問題を取っても、この価値の問題については極めてパターンナルです。あるいは決定の仕方を含めてもそうです。野党の言う事は聞かない独善的な決定の仕方を繰り返すというのは、まさにパターンナリズムというものの在り方なんだろうと思います。

もう一つのお金の問題。このときには時折、意見が食い違うときがあります。例えば安倍内閣は、私は明らかに下方のリスクの個人化を志向していると思っていますけど、最近ですと私も子供がおりますが、幼稚園とか保育園は無償化という制度が導入されました。こういう政策をみても学生からも、「安倍内閣ってリスクの社会化をやってるんじゃないですか、むしろそういうところにお金を配分する政策をやってるんじゃないですか、しかも消費税上げましたよね、やっぱりリスクの社会化の政党じゃないですか」と言われるんですけども、私は、違うと思っています。どういうことかという、これは印象論よりも世界の基準との比較考察を試みる必要があると思います。OECD 諸国と言われる先進諸国の中で、日本は政府の規模がどういう位置にあるのかというのを冷静に数値で見てもいいと思います。政府の規模を判断するためにはいくつかの指標があるんですけども、政治学ではおおむね三つぐらいの指標・数値を使います。一つは租税負担率です。税金が高いか安い、もちろん高ければ高いほどみんながたくさんお金を出している、大きな政府型になっていきます。租税負担率が低ければ低いほど小さな政府型ですね。また、歳入面だけ見てもダメで、歳出面も見なければいけません。これは全 GDP に占める国家歳出の割合という数字を見ます。日本の全ての国民経済の中での国家歳出。例えば公共事業に使っている予算というのは、経済活動の中でも公金を使った経済活動ですね。あるいは福祉事業もこれにあたります。こういうような税金を使った事業というのが全 GDP の中で大きくなればなるほど、これは大きな政府ということになっていきます。全 GDP に占める国家歳出の割合が大きい小さいかを見るわけです。

あともう一つは、これは皆さんの中でも公務員の方がいらっしゃると思いますけれども、公務員数です。これはもちろん人口比で比較しなければいけません。ですから、人口 1,000 人中どれぐらいの公務員がいるのか、というふうに見る。公務員という定義は、これ各国ごとに異なる部分もあって難しいんですけども、ざっくり言うと、税金で給料をもらっている人という定義だと思っていただいて結構

です。ただ、私のような人間は微妙なんです。国立大学法人の教員なもんですから、厳密には、法人化されて以降は公務員ではありません。しかし、給与は税金から出ているわけです。授業料なんかも出ている。なので、こういう人間は一応、公務員にカウントします。その上で、どれぐらいの公務員数が各国にいるのかという数値を見ます。大体この三つの数値を総合的に見て日本がどれぐらいの位置にあるのかという判断をするんですけども、先進諸国 OECD 諸国の中で真ん中辺りを平均値だとすると、日本は一体、上の方なのか下の方なのか。実はこの三つの数値を見たときに、日本は韓国と並んで最も小さな政府という分類に属する国になっています。日本、韓国、そして若干大きいのがアメリカです。アメリカ、日本、韓国というのは一つのグループでして、これは世界の中で最もこの数値が小さい国の一群ということになっています。ですから、私はより正確に言うならば、日本は小さな政府というよりも、小さすぎる政府と明確に言った方がいいだろうと思っています。

今日は自治労の方とかもいらっしゃると思いますので、公務員の問題についてよくご存じの方もいると思いますが、日本は明らかに公務員が少ないんです。公務員数の平均値を取ってみると、データの取り方によって若干の数値が前後しますが、おおむねヨーロッパ諸国では、1,000 人中 70 人台から 80 人台ぐらいの数値が平均値として出てきます。イギリスが大体 70 人台半ばぐらいの数値で、これが大体基準ぐらいの数値ですね。フランスは少し大きな政府で 1,000 人中 90 人ぐらいが公務員。さらには北欧諸国、ノルウェーとかデンマーク、スウェーデンなどになると、100 人を超えてきます。ですから 10 人中 1 人以上公務員なわけで、こういう国が大きな政府だという、まあフランスぐらいまでが大きな政府というふうに見なされるような分類の仕方です。ヨーロッパの中で最も小さな政府、スリムな政府と見られているのがドイツでして、大体 1,000 人中 50 人台ぐらいの数値が出てきます。さあ、それでは日本です。日本は 1,000 人中どれぐらいの公務員数なのかという、実は 30 人台後半ぐらいです。38 人とか一番大きいので 40 人台前半です。

つまり、ヨーロッパで最も小さい政府であるドイツよりも、さらに公務員数が少ないというのが日本の現状です。ですから何が起きてるのかというと、もう高知の皆さんはよくご存じだと思います。私は10年間北海道で生活をしていたのでよく分かっているつもりですけど、公務員足りないわけです。だから、非正規労働で補うということになっていて、官製ワーキングプアと言われる状況が常態化しているわけです。

今、全国の自治体で非常に大きな問題になっているのは、役所の中の半分以上が非正規の人になっている自治体がたくさん増えている状況になっていることです。当然のことながら、私よりも皆さんの方が実感されていると思いますけど、そういう地方行政は災害に弱いですね。というような危機管理の問題を含めても、非常に日本は脆弱な国になっているというのが現在の状況です。ですから、いくら安倍内閣が若干の上乗せをしたところで、この真ん中の平均値よりも上のリスクの社会化という方向へと舵を切っているとは言えないわけです。せいぜいが、一番どん底のところが増、ぐらいの感じです。以上のことからしても、やはりこのIV番のところがある今の安倍内閣の現状だろうと思います。

## ～マトリクス図上における自民党の変遷～ 野党も含む政党の位置関係

ただし、安倍内閣は別として、自民党という政党がずっとIV番の政党だったかということとは実は違うんです。今から50年ほど前、1970年代に保守の危機と言われた時期ですけれども、その頃の自民党が属していたのは大体上の方です。I番からII番の領域。田中角栄さんなんかは典型的なI番の政治家ですね。極めてパターンルだけれどもリスクの社会化、列島改造論をやり福祉元年ということで、お金をとにかく配分していく。そういう政治をやっていたのが当時の自民党でした。旧経世会ですけれども、それに対してIIのゾーンには宏池会がいたわけです。リベラルな考え方で、しかしちゃんと配分はやりましょうという考え方。当時ですと大平正芳さんですね。宏池会で最後の首相になったのは宮澤喜

一さんです。この派閥、今は岸田派になっていますが、基本的には田中派・竹下派は現在では平成研になっていて、このI番に位置するのと、宏池会のII番のグループというのが基本的に自民党の主流派、保守本流と言われた政治の流れでした。ですから、このIとIIというところで、過去の自民党はやってきた。そして、安倍さんが所属する清和会はこのIV番に属しているという、そういうような状況が日本政治の一つの骨格だったわけです。

しかし、1990年代に入ると、この上のゾーンから下のゾーンへと自民党がシフトしていくということになりました。その一番最初のきっかけを作ったのは、お亡くなりになりましたけれども中曽根さんでした。1980年代になると、人口減少社会、少子高齢化が予想される。であれば、これまでのような放漫財政では難しいという考え方が出てきた時に中曽根さんは、例えば国鉄民営化とかいろんな形で、国家の縮小という方向に走った最初の政治家だったと思います。ただしそれは一気に小さな政府にいったわけではなく、やはり90年代を迎えないと、小さな政府ゾーンに日本は入っていきません。そこに真っ先に取り組んだのは橋本龍太郎さんです。橋本行革というのがこれにあたりました。しかし、この時に日本には大きな不況がやってきます。山一証券とか、いろんなところが倒れていきました。これを引き戻そうとしたのが小渕内閣で、小渕さんは世界の借金王というふうに分の事を自嘲していましたが、やはり財政出動が必要であるということで、小渕さんはこの下のゾーンに行こうとする自民党を再度上の方に戻そうとした最後の政治家だったんだろうと思います。しかし、この小渕内閣は任期半ばで、小渕さん自身が病に倒れ、そして森内閣を挟んで小泉構造改革がやってくる。この時から自民党は、明確に上のゾーンから下のゾーンへと切り替えていく方向を志向するようになりました。

しかし小泉純一郎という人は、あまり価値の問題には触れようとしなかった人でした。唯一触れたのは、靖国神社の参拝ぐらいだったろうと思います。他の問題、憲法改正とかには全然手をつけませんでしたね。彼自身は、価値観の問題というものにはほとんど関心がありませんでした。むしろ行革、特に

郵政民営化には執念を持っていた人です。ですから、私は消極的リベラルとしか言いようがないと思いますけど、小泉さんは、このⅢ番のゾーンにぐっと自民党を変えていった人です。このⅢのゾーンが新自由主義、ネオリベリズムというふうに言われるゾーンです。そしてこのⅢのゾーンから、さらにぐっと価値のパターナリズムの方へと舵を切ったのが私は安倍内閣だったと思います。つまり、田中角栄の時代から見ると、自民党は私は左回りに一回転しているんだと思うんですね。Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳの順番でぐるっとシフトしていて、私は、これ自民党一回転説というふうに言っているんですけども。そこでじゃあ、自民党は今度、さらにぐるっと回って元のⅠ番に戻るんですかとよく聞かれるんですけど、絶対に戻りません。Ⅳ番をより強化させていくというのが、どう考えてもこれからの自民党の方向性です。なぜかという、端的に言えば、安倍内閣が長過ぎるからです。どういうことかと言うと安倍内閣、あるいは安倍総裁と言った方がいいんですが、安倍総裁になってから衆議院選挙を、もう3回やっているんです。つまり安倍さんを中心とした執行部が選んだ人間によって選挙が、衆議院においてもう3回行われているんです。その結果どうなったかという、3回生以下の議員、つまり安倍総裁の

元に公認候補となって当選してきた議員の割合が、衆議員の中で今50%を占めています。ですから、約半数が既に安倍総裁執行部の下で選ばれた議員さんたちなんです。

その中には杉田水脈さんとかいろんな人がいるわけですが、この人たちはほとんどⅣ番の人です。この人たちがこれから10年経つと議員生活20年とか、10数年というゾーンに入ってきて、次々と大臣になっていくわけです。つまり、このゾーンは自民党の中では、分厚い層なんです。このゾーンが10年、20年後の中心層になっていくわけですから、必然的に自民党は、よりⅣ番のゾーンに傾斜していくというのが、どうみても自民党の議員名簿から見えてくる傾向だろうと私は思います。現在、例えば石破さんとか、このゾーンではない人たちはたくさんいます。しかしその人たちは、1980年代から90年代前半の自民党の中で当選をした人です。その人たちは、例えば河野洋平さんが総裁だったり、宮澤喜一さんが総裁だったり、野中広務さんが大きな力を持っていたり、そういうような時代に選ばれた候補者ですから、中には比較的リベラルな考え方を持った人がいますが、その人たちは今後10年も経つとほぼ引退するでしょう。そうした時に自民党は明らかに、このⅣ番の、日本型ネオコ



ン政党に明らかにシフトをしていこうというの  
が、予想される自民党の将来像だと思います。

だとすれば、野党はどこを取るべきか、です。これは明確でして、私はずっと野党の政治家の皆さんに申し上げてきたことですが、II番のゾーンです。IIのゾーンを絶対取る。それによって、国民に対して大きなビジョンと選択肢を作っていくというのが、野党の側の大きな、政権に近づく最も重要な道筋であろうと。細かい政策の是非というのはいろいろあるにしても、大きな国家ビジョンというのは、リベラルでありリスクの社会化ということでやっていく。そして、それを大きく安倍内閣あるいは自民党に対峙させるというのが役割として野党に与えられているものだと私は思っています。さあそのときに、です。昨日や今日のニュースでも、野党の合流の話が上手くいってないというニュースが報道されていますが、最悪の結果に、つまり一緒にならないのが私はいいと思いますけど、仲たがいをしているというように、永田町の論理が見えると国民が引いてしまうっていうのが、あの人たちにはよく理解できていないんだなあと痛感をいたしました。しかしそれでも、このII番のゾーンを、どうまとめていくのかというのは、喫緊の課題です。

現在のもめごとの一つの発端に、希望の党という政党があります。この希望の党について、しっかりと総括しなければいけません。私は希望の党ができるということになった時に、そのニュースを聞いた瞬間に「ああ、これは絶対失敗する」と思いました。ただし、2時間考えました。何で2時間考え逡巡したかということ、ものすごく私が親しくしていた人たちが、この騒動の中で希望の党から出馬をする。私自身がブレインのようにやっていた政治家に対して、希望の党は必ず失敗すると。どう駄目なのかということを論評すれば、彼らの選挙に対して悪影響を与えるかもしれない、さあどうしたものかっというので、かなり逡巡しました。やっぱり私は政治学者であるわけで、学者の使命というものをしっかりと果たすことの方が重要であるというふうに思い、希望の党は間違いであるというのをその時に書きました。小池さんの「排除の言葉」が出る前です。あれは、小池さんが排除と言ったから崩壊し

たというふうに言われていますけど、断じて違います。もっとその前に破綻をする、根本的な破綻があると私は考えていました。その理由は、端的に言えば、何で民進党から希望の党へのシフトは失敗するのかということ、小池百合子と組んだからです。どうということかということ、このマトリクス図の中で、小池さんはどのゾーンの政治家なのかということ、小池さんの全てのインタビュー、全ての対談を読みましたが、どう分析してもIV番のゾーンの政治家です。つまり自民党の、小泉内閣を支え、そして安倍内閣と一緒にやっていた人ですから、明らかにこのIV番のゾーンの色彩が非常に強い政治家です。

私がこの図を使ってずっと野党の皆さんに説明してきたのは、斜めと組んではいけないという法則なんです。つまり、野党がII番を選択肢として持つならば、I番やIII番とはパーシャル連合は可能です。例えば民主党政権の時、亀井静香さんの国民新党という政党と連立を組みました。あの政党は、はっきりとしたI番の政党です。郵政民営化反対、新自由主義反対、しかし夫婦別姓も反対という政党でした。これは明らかにパターンルでありながらリスクの社会化をやるという、一種の田中角栄型の政治で、これこそが日本の保守本流であると考えたのが亀井静香だったんです。このI番の政党とはパーシャルな連合、つまり金の配分などの問題をめぐっては手を組めると。しかし価値の問題をめぐっては手が組めない、というのがこのゾーンです。あるいは民進党という政党になった時にも、維新とか、昔みんなの党だった人たちが民進党に入ってくるようになりました。「結いの党」という政党を作ったりしましたね。この人たちと合流する時にも、私は民進党の執行部の方といろんな話をしましたけれども、パーシャル連合でなければいけない、入ってきたとしてもそれを中核イデオロギーにはならない、なぜなら、リスクをめぐる考え方が違うからだというふうに申し上げていました。ですから、III番とは組んでもいいけども、それを中心の論理に据えてはならない、そのことを肝に銘じてください、ただし組むことはありえます、小選挙区制ですから仕方ないでしょうというのが私の考え方でした。

しかし、やってはいけないのは斜めなんです。IV

番と組んじゃ絶対に駄目なんです。なぜならば、何をやりたい政党か分からなくなるからです。一体この政党は何なのかというのが見えなくなるんですね。実際にどうだったか、思い出していただきたいんですけど、希望の党というのが出てきた時に、皆さんは「気持ち悪いな」という感覚を持ちませんでしたか？一体この政党は何なんだ、何をやりたいのかというのがよく分からないけど、何か小池さんの勢いを使いたいんだっていう政党だったわけですよ。これは明らかに数週間で破綻をする、こういう政党というのは、やはり私はやってはならない。あつという間に崩壊をする、というのが私の持論だったもんですから、希望の党ができた時にはいろんな人の顔が浮かびましたけど、これは明らかに失敗をするということを言いました。そうすると案の定、排除の論理というのが出てきて、このⅡ番のゾーンのリベラル色の強い人たちを切るっていう話になってきたわけですね。そうすると、ますますこの政党が一体何をやりたいのか。民主党を応援してきた人にとっては、希望の党って一体なんなんだと、あんな政党を応援できるのかと、選択肢がないという思いを持つようになったんですね。その選択肢がない、どこを選んでいいか分からないという声はどうなったかという、「枝野立て」という言葉になったわけです。もう一つ選択肢を作ってくれ、このⅡ番のゾーンをちゃんと作ってくれと。共産党以外で私たちの選択肢を作ってくれというのが、あの時の「枝野立て」という言葉だったわけです。

こういった経過で、枝野さんが立ったわけです。あの人、非常に慎重で腰の重い人なんですけど、私はあの時が、枝野さんが人生で唯一ジャンプをした時だと思います。勝つかどうか分からないけどやるしかないと思って、彼は決断をして一人で記者会見に向かって行った。私はこの記者会見に向かって行った姿を見た時に、勝ったと思いました。これで一つの選択肢ができたということで国民が盛り上がり、そして立憲民主党の勝利につながった、というのが2017年10月の大きな流れだったんだろうと思っています。まあしかし、立憲民主党はそこから失速をしていくことになったんですけど、この話をすると長くなりますので今日は止めておきますけど、

その旗を、別の角度からやってきた山本太郎という人に奪われようとしているという状況です。ここからどういうふうに野党側の政局を考えるのかというのが、私たちのまた新たな仕事になってきたわけですが、その話は今日の本題からは外れるので、止めておきたいと思います。

ところで2年数カ月前、立憲民主党が立ち上がるということになった時に、私が枝野さんに申し上げたことがありました。もう今だから言ってもいいと思うんですけど、民主党が政権側から落ちた後に、いろんな民主党の人たちから私は話を聞かせて欲しいと言われました。どうすれば今後、民主党という政党を立て直し、どういうビジョンを持てば政権に復帰できるのかということについて知恵を借りたい、といろいろと言われました。その中で枝野、福山（哲郎）という2人の政治家とは4年間ぐらい、かなり綿密な勉強会をずっと続けていました。そして、あの希望の党騒動になった時に、私が枝野さんに一つだけ、どうしてもこれだけは外してはいけないと申し上げたのは、「保守だと言い切ってください」ということでした。「枝野さんが左だというふうに見えた瞬間に、次の選挙は負けます」と。「私は保守なんだ。ただしリベラルな保守なんだということによってしか活路はありません」というのが、私が枝野さんに対して強く申し上げたことでした。それは、それまでの4年間に及ぶ勉強会で、ずっと枝野さんと話をしてきた中心的な問題でした。

つまり、今、日本の有権者というものをみたときに、大体どういう比率が出てくるかということ、2：5：3の法則ということがよく言われます。ということかと言うと、2というのが絶対に今の自民党勢力には入れないという人です。10人いたら2人です。5というのは無党派層、あるいは選挙に行かない人です。そして、3というのが絶対に与党の側、自民党側に入れるという固い層です。それで、安倍さんはこれまで、どういうふうにして選挙に勝ってきたのかということ、戦略は明確です。低投票率に持ち込むことです。選挙になれば、選挙を盛り上げないことに徹します。そうすることによって何が起きるかということ、5の人たちが寝てくれるわけです。選挙に行かない。すると、どうなるかという

と、3対2で勝つというのがこれがずっと安倍内閣がやってきた選挙戦略でした。こうやって固定票で勝つ。つまり連合票よりも、あちら側の業界票の方が多いということです。この3対2で勝つというのが安倍内閣のやってきた選挙の根本原則でした。自民党はこれをずっとやってきたわけなんですけど、この原則から外れた人がたった1人いました。小泉純一郎という人ですね。この人だけが全く違う選挙の仕方をやりました。どうやったかという、彼は3の人たちを敵にしたんです。自分たちの強固な土台になってきた支持者層を既得権益者と言って、そして自民党をぶっ壊すと言い、高い投票率に持ち込んで5の人たちを味方に付けて、浮動票を自民党に流させてそれで勝つという戦略は、非常に上手な戦い方でした。それに対して安倍さんは、元々の3対2の図式で固定票で勝つという選挙をやっています。

つまり、このⅡ番の層に訴えかけても5の人たちは動きません。5というのは緩やかな、そして私は、5のかなり多くの人たちはⅡ番に属すると思っています。しかし、左派の人たちは教条的で面倒臭いというふうに思っている人が多く、一般の常識だろうと思います。その人たちを自分たちの味方にしないといけない。ここが私は野党側の戦略として非常に重要なポイントだと思っています。左派政党として生き残るならば永遠に与党にはなれません。しかし、もう少し広げて、リベラルな保守層を取り込むことによって、野党側に一つの選択肢ができてくるというのが私の持論です。ですから、枝野さんに対してリベラルな保守だと、その姿勢を貫きましようとして申し上げました。それが恐らく、「右でも左でもなく前へ」とか、「自分はリベラルであり保守である」というふうに選挙中、繰り返し枝野さんがおっしゃったことにつながったのかなと思います。私はもう一つの戦略として、これで希望の党をつぶせると考えたんです。希望の党が狙ったのは、まさにこのリベラルな保守という層でした。詳しいことは申し上げられませんが、私自身がずっとお話をしてきた人たちというのが希望の党を作ったために、希望の党のつぶし方というのもよく分かっていたつもりでした。まあそれで、枝野さんにこのⅡ番の

ゾーンを保守として取ると。それによって希望の党の居場所であるⅠ番の層を奪い、そして立憲民主党を第1党にするというのが、私の2年数カ月前の戦略でした。それは一定程度達成ができたんだと思いますが、その後は、私自身が考えていた方向と枝野さんの考え方が少しずつ来ている、というのが現在に至るプロセスでした。つまり、私が申し上げたいのは、このⅡ番のゾーンをもう一度定義し直すということです。そしてそれは、保守という側から、このⅡ番のゾーンを定義し直す。かつて自民党の中にいた、私が尊敬してきた河野洋平さんとか、あるいは大平正芳さんとか、伊東正義さんとか、そういう政治家が担ってきたゾーンを野党側に引き入れていく。そして、それを中核としながら、ある種の社民主義とも連帯をしながら政権運営をやっていくというビジョンをどう作るのかというのが、このⅡ番の層を核とした政治の本質だというふうには私に考えてきました。

## ～あらためて、「保守」の定義とは～ 大切なものを守るために少しずつ変わる

さて、ここで、レジュメの「1. 保守とは何か」のところに行きたいと思います。保守って一体何なのでしょう？リベラルの反対語ではない本来の保守とは一体何なのか、というのが次の大きな問題として浮上してくることになります。そしてそれは今日のテーマの副題でもある、アジアとの連帯、共生という問題とも非常に強く関連します。例えば、宮澤内閣の官房長官は、前半が加藤紘一さん、後半が河野洋平さんで、河野さんが宮澤内閣の崩壊直前に出したのが河野談話でした。韓国に対する、北朝鮮も含んでですが、慰安婦問題について日本の問題点というのをしっかりと法的に明らかにする、というのが河野談話でした。アジアとの共生の道も、恐らくこのⅡ番のゾーンをどう定義し直すのかというところで見えてくるんじゃないかと思っています。

そこで、保守です。保守って一体どういう考えなのか、です。保守という言葉は非常に対義的に使われる傾向があります。私は初めて行った海外が、

今もめているイランなんです。着いたのが夜のテヘラン空港だったんですが、自分は大丈夫だろう、なんとかなるだろうと思っていたんですけど、いきなりテヘラン空港に着いたら、やり心寂しかったですね。ペルシャ語は全く分からないし、どうしようという感じで、インフォメーションに並んでいる時にはもう帰りたいなあと思ったりしました。このように、いきなりそれまでと全く違う環境に置かれると、私が思ったように「もう、帰りたいなあ、味噌汁飲みたいなあ」とか、そういう気持ちになるのを指して、「あんたは保守的だから」というふうに言ったりしますよね。こういう心情というのは、少し分けて考えないといけないのが保守という概念だろうと思っています。これは人間の普遍的な心理の問題であって、共産党の人であろうと、自治労の人であろうと、海外にポツンと一人で行くと寂しいな、やっぱり日本に帰りたいなあというふうに思ったりすると思います。こういうような、ある種の人間に普遍的な、変化を嫌うというマインドを全て保守というふうに言ってしまうと、保守の輪郭というのがぼやけてしまいます。

例えば私の親父は、昭和22年生まれなんですけれども、いわゆる団塊の世代、全共闘世代でした。どうも大学では暴れていたらしいんですけど、詳しいことは私などには全然話しませんが、私の子供の頃なんか、今は取ってないですけど、赤旗の日曜版を取っていました。ですから、親父は自分のことを左翼だと自覚をしていたんだらうと思いますけど、しかし、母親に言わせると親父は保守的だということになるんですね。どういうことかということ、ちなみに私は兄弟3人なんですけど、兄弟は朝食はパン食でいいんです。自分で食パンを焼いて勝手に食べて学校に行きなさいという感じだったんですけど、親父だけは、白米と納豆と味噌汁がないと朝食じゃない、という感じだったんですね。だから、母はもうハアーツと言いながら、「もう、お父さんは保守的だから」と言うんですよ。だけど、たぶんうちの親父はずっと共産党に票を入れてると思うんです。それでも、母から見ると保守的だつてことになるわけですね。

つまり、ここが分けないといけないところで、共

産党の支持者であろうが左派政党の支持者であろうが、納豆と味噌汁を明日の朝は食いたいと思うわけですよ。つまり、こういうような人間の普遍的な、変わるということに対する防御姿勢というものと、政治的な文脈で言う保守というのは違う意味だと考えた方がいいというのが私の考えであり、概ね学者たちが説いてきた保守の輪郭の問題です。これを説明しているのが、レジユメにある、カール・マンハイムの『保守主義的思考』という本なんです。若干難しい本なんですけど、内容は、今申し上げたことがエッセンスです。マンハイムという人は、この「伝統主義」である自然的保守主義と、「保守主義」と言われる近代的保守主義とを分けましようと言った人です。つまり、自然的保守主義というのが納豆や味噌汁を朝飯に食いたいと思う気持ちであり、私がテヘランに行って寂しいと思った気持ちのことです。それに対して近代保守主義というのは、それとはまた違う特定の文脈を持った思想である、というのがマンハイムが言ったことです。我々は普遍的な人間の本性としての伝統主義と、一つの特殊な歴史的、近代的現象としての保守主義とを区別する、ということを行っています。その時に、問題にするのは後者の方、つまり、ある歴史の中で生まれてきた政治上の保守というのは一体どういう立場なのか、という問題です。

そこで、この問題を考える際に必ず読まないといけない本があります。それは、エドモンド・バークが書いた『フランス革命についての省察』という本です。そして、この本から近代保守思想はスタートした、保守主義の元祖というふうにバークは言われています。バークはイギリスの野党政治家でした。この人が、同じ時代に海の向こう側で起きたフランス革命に対して異議申し立てを述べたのが、この「フランス革命についての省察」という本です。フランス革命はやっぱりおかしいぞ、と彼は言いました。何でおかしいのかということ、煎じ詰めて言えば、「フランス革命を担っている、支えている人たちの人間観がおかしい」と言っています。どういうことなのかということ、いわゆる啓蒙主義左派というのは基本的には人間の理性を無<sup>むびゅう</sup>謬の存在とみなしている、つまり合理主義ですね。人間が合理的に行動

し、そして革命によって正しい答えの方に導き、それを遂行していくならば、やがて世の中は進歩をし、みんなが平等に生きられる社会を作ることができる。だから頑張っていこうというのが基本的な近代の左派思想というものであると。しかし、この考え方には大きな人間観の過ちがあるのではないか、それは、理性というものに対する過信なのではないかとバークは指摘しました。

バークはこう言っています。「私は人間というものを多く見てきた。そして歴史上のいろいろな人物というものをずっとつぶさに見てきた。そのときに見えてきた人間の命題とは何か。それは、人間は間違いやすいということである」と彼は言うわけです。どんなにIQが高い人であろうと、全ての世界というものを正しく理解することは不可能であり、正しい世界というものを、正しい正解というものを所有することも不可能である。どんなに頭の良い人間だって誤認をし、過ちも犯す。どんなに良い人だって、心のきれいな人だって微かなエゴイズムや妬みというものが人間には巣食っているはずである。つまり、人間という存在に普遍的な命題として見えてくるのは、不完全性という問題ではないのかというのがバークの言い分だったんですね。どんなに頭の良い人であろうと間違いや誤謬<sup>ごびょう</sup>を含んだ存在であり、人間は完成されない動物であるとするならば、そんな不完全な人間によって構成されている社会も残念ながら不完全なまま推移をせざるを得ないというのがバークの考えでした。つまり、人間社会というものは、最高点には到達せず、常にさまざまな過ちによって左右され、それを補正していくということに追われる社会であって、その社会をどうやって丁寧に生きていくのかというのが本来の人間ではないのか、と彼は言うわけです。そして、そのときにも何かに依拠しなければいけない、それは何かというと、特定の個人、例えばエリートの理性に基づいた革命思想よりも、長い年月を掛けて無名の人たちが、今はもう死者となった無名の人たちが歴史の風雪に耐えながら残してきた良識とか経験値とか、それが形となっているものが伝統であり慣習というものである。そういうものに依拠しながら、世の中を少しずつ変えていくというような在り方。彼はグラ

ジュアルな改革という言い方をしています。あるいは「リフォーム・ツウ・コンサーブ」という言葉をこの本の中で使っています。「リフォーム・ツウ・コンサーブ」、保守するための改革ですね。自分たちは何も変えないと言ってるわけではないのだと。だって現在だって間違えている人間、間違いを犯しやすい人間によって構成されているために、今ある制度を抱きしめたところでなんの意味もない。それもまた不完全な存在である。いかに50年前に素晴らしい福祉制度ができたといっても、50年後に人口構成が変わってしまうと、その制度は全く違う意味を持ってしまい、逆に福祉の足かせになってしまうかもしれません。時代の変化と共に、伝統的なものの本質をつかみ直しながら、大切なものを守るために変わっていくという姿勢、実はこのリフォーム・ツウ・コンサーブというのが保守のエッセンスであるとバークは書いています。ですから、革命のように一気に変えようとするところには誰かの、革命家には自分自身の理性に対する思い上がりが存在して、俺が書いた正しい答えに従え、そうでない奴は粛清すると、まあこんなふうになってしまう。そうではなくて、そういう人間はどこにもいないんで、それよりは長年の多くの人たちの経験値を基にしながら、現状に手入れをしていくというのが堅実な改革である、というのがバークの改革論だったんです。私自身は、これは長年続いている老舗と同じ理屈であるというふうに思っています。

私は、生まれは大阪です。大学院時代は京都で過ごしました。ですから、20代のほとんどは、京都とインドで生活をしていたんですけど、私の京都の友人なんかは実家が老舗で、その倅だったりするわけです。そういうお店に遊びに行かせてもらおうと怖そうなお父さんがいたりするわけですが、お話をしている中で、私が保守とかそういう問題を研究しているということを言いますと、1回言われたのは、こういうことでした。「中島君なあ」と、「うちの店は江戸時代からあるけどなあ」と、「江戸時代から同じ味出してんとちゃうでえ」って言われるんですね。ずっと出しているわけではない、時代と共に変わっていると言うわけです。味覚は変わるんだと。例えば、「戦後すぐってどんな甘さを求めてた

か知ってるか」、「もっと全然うちのレシピは甘かった」と言うわけです。しかし、ドンドンと甘さに対する感覚が変わってくると、当然のことながら商品を手入れしないとイケない。「大切なものを守ろうとするためには、その時代の変化に応じて丁寧な手入れをしていくことが、実は長い間老舗が生き残っていくエッセンスである」というふうに、そのお父さんは言いました。だから、大切なものを守るためには変わっていかないとイケない、時折は新商品に挑戦したりする、新しい名物を作ったりする、その永遠の微調整のようなもの。これこそが老舗のエッセンスであるというふうに言われたんですけど、私はこれがまさに保守、私がこれまで考えてきた保守の定義に非常に近いと思いました。

レジュメにも書いてますけど、保守というのは、「復古」でも「反動」でも「進歩」でもありません。保守は「右翼」とも違います。「原理主義」とも違います。世界の原理主義、右翼というのは、過去に対して理想社会を設定し、その過去に戻れば全てがうまくいくというのが基本的な考え方です。イスラムの過激派、原理主義の人たちというのは、ムハンマドの時代こそが理想的な社会であった。だから、この時代に戻ろうと主張している人たちです。イスラムの原初形態はよかった。しかし、歴史の波

にさらされてスーフイズム（イスラムの神秘主義）とか、いろんな別の要素が入ってきた。さらに西洋の影響を受けてしまって、イスラムが墮落した。その結果、今のイスラムの窮状がある。だから元に戻せというのが原理主義者の言い分です。戦前の国家主義者たちも大和心の時代へと回帰せよと言ったわけですね。漢意<sup>からごころ</sup>という外国から入ってきた思想を排除して元の状態に戻ろうというのが、右翼、原理主義ですけども、保守はこれとは決然と違うのだと主張します。なぜならば、昔の時代に戻ったからといって昔の人間も不完全だったわけで、昔の問題があるだけだというのが保守の考え方です。だから復古主義はとりません。ある一時期に戻ろうという、そういう考え方は保守の人ではありません。あるいは先ほど申し上げたように反動でもありません。反動というのは何も変えないと。しかし、今生きている私たちが当然のことながら不完全であるために時代が変わっていくなれば、それにに応じて変わっていかねばいけません。もう一つとれないのが進歩です。残念ながら未来の人間も不完全である、未来には未来の問題がある、未来に人間が最高潮の状態には到達しえないであろうという、これが保守の考え方なんです。そして、よりまともなものやっていくためには、理性を超えて長年の間、無名の人たち



によって培われてきた英知を積み重ねながら、その延長線上に未来を描いていくという作業が必要であるというのが保守の考え方です。

レジュメの次の項にいきたいと思いますが、これはニーバーという人が言った「ニーバーの祈り」という有名な言葉なんですが、これ保守のすごく重要なエッセンスだと思います。ニーバーはこう言いました。「神よ、変えることのできるものについて、それを変えただけの勇気をわれらに与えたまえ。変えることのできないものについては、それを受け入れるだけの冷静さを与えたまえ。そして、変えることのできるものと、変えることのできないものとを識別する知恵を我々に与えたまえ」と神に祈ったそうですが、この考え方というのは保守の考え方に非常に近い考え方だろうと思います。つまり、私たちの生きている現在というのは、膨大な過去の蓄積、知的財産の上に成立をしているわけであって、改革というのは過去から相続した歴史的な財産に対する永遠の微調整を加えていくという、そういう作業であろうというのが私の考えている保守です。さて、こういうものを近代保守の一つのフォーラム、輪郭としたときにどういうことが見えてくるか。先ほどから申していますように、保守というのは懐疑的な人間観を持っています。人間は間違いやすい存在だと思っています。当然のことながらそれは自己にも向けられます。私だって間違いやすい。私だって何かを主張しているけれども、間違えているかもしれないという、保守にとって一番重要なのは、そういう自己懐疑の念です。それだと何が起きるかということ、自分と異なる意見を述べている人たちの言い分をまず聞いてみようという話になるわけです。なぜなら、自分は間違えているかもしれないからです。そして、聞いてみた結果、その人の言っていることにはなるほどと思わせることが多数含まれていると思えば、その人の言っていることも理解できる、分かる、一理あるなと思えば、そこから合意形成が始まるわけです。

そのように、両方の良いところを取りながら、どの辺りで合意形成ができるのかということを粘り強く話し合う、それが保守政治というもののエッセンスです。ですから、保守はずっと自分たちこそがリ

ベラルだというふうに考えてきました。自分は間違えているかもしれない。しかし、だからこそ、自分と異なる考え方、イデオロギーの人たちと対話を繰り返し、そして着地点を見い出すというのが保守の矜持だったわけです。だから冷戦時代に、保守の政治家たちはずっと言っていました。自分はスターリンとは違う、スターリンは自分たちこそが正しいという正解を所有しているために、それと異なる人間を徹底的に思想の自由を弾圧し粛清をしていった。あるいは中国共産党をみてくれ、また、北朝鮮はリベラルなのかと。違うぞと。自分が間違えているかも知れないが故に自由を貴ぶんだというのが保守の20世紀の矜持だったんですね。ですから、私はこの保守こそがリベラルであるというのが実は普遍的な命題であって、むしろパターナリズムの方に共産主義思想とかが陥りやすい傾向があったんじゃないのかと思っています。こういうような、リベラルな保守という立場を今の自民党が全く失っていることが、私の自民党に対する非常に強い不満であり、憤りであり、批判であるわけです。安倍内閣はどういう政治をしてきたのか。これは結局のところ多数という数に任せた強行採決であり、異なる他者との意見交換など全くせず、議会での議論を軽視するという態度ばかり。昔の自民党の政治家はああいうことはしませんでした。独善的に自分たちが正しいとして、野党の質問を時折せせら笑い、そして時間が経てばいいんだという態度で国会審議を進めていく。これは保守の態度ではない。保守の思想や態度とかとは全く掛け離れている、というのが私自身の考えです。

そして、保守本流というのがやはりこのII番のゾーンです。自民党の宏池会が担ってきたゾーンであろうというのが、私自身の考え方でもありますし、今の自民党にこのゾーンを望むということはもはや不可能なので、それに対峙するもう一局として野党の側が、このIIのゾーンをしっかりと作るべきだと思います。そしてこのIIのゾーンについて言えば、世論調査の結果を見ると、国民はIV番の側に傾斜しているわけでは全くありません。今だに憲法改正は止めておくべきだというのが半数を超えています。ですので、国民の思考ゾーンとしては、このII

のゾーンが実は一番多いんだと私は思っています。ここをどういうふうに提起するのかが、野党側にとっての戦略として非常に重要だと私は考えてきました。

## ～パックス・アメリカナの終焉とパワーの多元化～

### EUに学ぶアジア連帯の理念と可能性

さて、最後にレジュメの「2. アジア主義の現代的可能性」のところにいきたいと思えます。この考え方からいくなれば、やはり宮澤喜一さんがそうであったように、あるいは大平正芳さんが外務大臣の時に、中国との国交正常化をしました。田中内閣の時ですけれども。宏池会のアジア重視っていう考え方。アメリカにも一定程度は協力しながら、アジアとの連帯というものを模索するような多元的な外交というのが、私は非常に重要な意味を持って来るだろうと思っています。

さあそれで、現在です。世界情勢として、この10年ではっきりしてきたことは一体何なのかというとアメリカの時代の終焉です。パックス・アメリカナ、アメリカが一強で世界の警察として振る舞った、あるいは振る舞おうとしたというのが1990年代の世界情勢だったと思います。父ブッシュ内閣の時に、歴史の終わりということが言われました。フランシス・フクヤマという人が、もう歴史は終わった、イデオロギー闘争はもはや起きない、最終的に自由民主主義陣営の勝利であって、これ以上歴史は動かない。だからアメリカの勝利であり、あとはその考え方が世界に浸透していくだけだからアメリカはその役割を果たせ、というのが「ワールド・ニュー・オーダー」と呼ばれる新秩序をアメリカが作っていくというアメリカ一強時代、パックス・アメリカナの思想でした。しかし、その延長上でやったイラク戦争で手痛いしっぺ返しをくらい、そしてアメリカの経済がドンドン沈没した結果、2010年代に入るとアメリカは勢力を失っていきました。中東からの大きな撤退、リバランスというふうにオバマは言いましたが、あれはアメリカの中東からの撤退だけではなく、世界の覇権は中

国との関係に移っているのです、日本などと連携した世界戦略を取る。それを自民党政権は喜んだわけですけれども、しかしアメリカはそれぐらいの余力しなくなってきたというのが現在の状況です。しかし、です。このアメリカの一強時代が終わりを告げようとしている。じゃあ、アメリカに代わったスパーパワーが現在、現れようとしているかということも疑問です。世界は多元化している、パワーが多元化しているというのが正しい見方なんだろうと思います。

中国がこの代わりができるかということ、そうはならないでしょう。非常に大きな国であることは間違いないですが、非常に脆弱な部分もあります。そしてロシアも台頭しています。ロシアも非常に大きな力を持ち、核を持っている。EUだって、後でお話をしますがEUも絶対に無くなりません。さらにインドが強い、ブラジルも強い。まあそういうようなさまざまな形で、冷戦時代の二つのイデオロギー闘争の時代からアメリカ一強の時代、そしてそんな単純な時代から、複数の大きな力を持った勢力の均衡状態という、権力の多元化という状態に今世界は入ってきています。すごく俗な言い方をすれば、戦国時代に入ってきているわけです。こういうような状況の中で日本はどのような構想を練るのかというのが、これからの時代のビジョンになってくるわけですね。日米安保一本でやっていくという選択肢はないでしょう。それをやるとアメリカと共に沈んでいくし、非常に不安定な世界の中に突入していくでしょう。その時にどう考えていくべきなのかということ、明らかに近隣諸国とどういった連帯をしていくのかというのが、非常にオーソドックスで正当な物の見方になって来るだろうと思います。

実はこれ、自民党側も分かっています。正確に言うと、自民党側のある人たちは分かっています。例えば私が最近、ずっと議論を深めているのが石破茂さんです。対談も雑誌に掲載されましたけど、石破さんはこの数年、アジア版 NATO ということに言及するようになってきました。つまり、彼は日米安保がもう臨界点にきているということをよく理解している防衛の通の人です。彼自身は自立論者なので、基本的に本音のところと言うと辺野古移設反対

の人です。沖縄からできる限り基地は撤去するべきである、日本の防衛は日本でやるべきであるというのが、石破茂の考えかたです。これから、日米安保の意味がドンドンと下がっていく。なので、地位協定の改定をやらなければいけないという強い持論もっています。と同時に、それをやることによって、アメリカとの関係性のハードルを下げることによって、アジアとの連帯というもう一方のゲームとして持っていないといけない。だからアジア版 NATO の枠組みが必要である、というのが石破さんが最近言っていることで、多くの自民党の、ちゃんと世界が理解できている人たちは、こういう状況が来ているということは理解しているでしょう。

さあ、こういった情勢の時に、私たちはどう考えても、明らかにアジアとなんとかやっていくという方向性、アジアとの連帯を模索せざるを得ないというのがリアリズムだという時代に突入してきました。そのときに私は非常に参考になると思っっているのが、EU です。どういうことかということ、最近ブレグジットとかイギリスの離脱とか、あるいはギリシャの問題とか、こういういろんなものが出てくると、日本のメディアというのは非常に短絡的なものですから、もう EU は終わったみたいな議論が席卷したりします。しかし、EU は絶対に終わりません。何故かということ、レジュメにも少し書きましたけど、EU の実態というのは、実は中小国の連合体です。ですから、例えば北欧諸国、ノルウェーとかデンマークにとっては、EU がないと、もはや外交が全くできません。例えばノルウェーという国は、木材交渉でアメリカともめました。これはバイの関

係で、1対1の関係で木材交渉をアメリカとやると、明らかにやられてしまいます。国力が全然違うから、ノルウェーは従わざるを得ないとなってしまうでしょう。しかし、これがEUを通して外交をやるとどうなるかということ、EU全体から経済制裁をされるとアメリカもたまったもんじゃありませんから、ノルウェーの発言権が非常に大きくなるんですね。EUの実態というのは中小国の連合体ですから、EUがないと、国際情勢の中でヨーロッパ諸国は、もう生きていけない状況になっています。イギリスはこれを自分でやるって主張しているだけなんです。ですので、EUがなくなるという選択肢はEU諸国にとってはほぼありえません。しかし、EUがかつて言っていたような一つの連邦国家になるという選択肢もありません。これも無理でしょう。

私が北海道大学で同僚だった遠藤乾さん、EU研究の第一人者の人ですけど、彼はEUのことを「未確認政治物体」というふうに言っています。つまり政治学者でさえも、歴史の中でも経験したことのないような、ある種の政治共同体がEUとして現れている、そしてそれは極めて中途半端な安定という問題を呈していると言っている。日本人ってどこか極端なんです。全部うまくいくという連邦国家構想なのか、あるいは全て破綻するというEU駄目論なのかなんですけど、政治というのは、その間の無数の選択肢のどこを取るのかという調整です。ですから、EUというのは連邦国家にもならないけれども、なくなることもない。しかしそれでも、安定した秩序を持っているという非常に中途半端な存在として永続するというのが遠藤さんの言っていることで、私はそのとおりだと思います。それが政治というものであり、それがEUの実態なんでしょう。そのときに、EUを俯瞰的に見たときに一体何が見えてくるかということ、EUはものすごく大きな成果をヨーロッパにもたらしています。なぜなら、フランスとドイツはあれほどいがみ合った、20世紀であれだけの大戦争を2回もやった国同士が、今、軍事費を削減できているんです。隣国との防衛という問題をほとんど考えなくていいものですから、いろんな2国間の外交戦略から国境防衛とかを外すこ



とができるわけです。こういうことが出来上がっているし、しかも、私のような人間はやはり数十年、数世紀という単位からヨーロッパを見てみたりするわけです。そうしたときに、例えば500年でもいいですが、この500年の中で現在のヨーロッパというのは、どうみてもヨーロッパ史上初めての超安定期ですよ。こんなことヨーロッパの歴史の中でありえないくらいの、ものすごい穏やかで平和な時代です。あんなにヨーロッパ中で、戦争しまくってきたあのヨーロッパが、です。十字軍の遠征、30年戦争、ナポレオン戦争、第1次世界大戦、第2次世界大戦、相手を全滅させるような非常に大きな戦争を繰り返してきたヨーロッパが、この70数年間ほとんど戦争をやってないですね。ほとんど戦争をやらず軍事費の削減ができるようになっていく。これは世界史上、非常に大きな安定期というふうに見るべきだろうと思います。

もちろん問題は山積しています。今でも移民の問題、右派政党の台頭というのがあります。しかし、これは巨視的な観点から見ないといけないですね。どの時代でもいろんな問題は起きます。しかし大きな観点からすれば、ヨーロッパに約100年近い安定をもたらしていることが、EUの持つ非常に大きな効用なんだろうというふうに思っています。じゃあ、何でEUは続くのか、何でEUはこのように成し遂げることができたのか。私は二つの大きなポイントがあると思っています。まず一つはこの70数年間、EUはECだった時代などを経て一つの連合体を作るんだということで、徹底的に各国が協議してきたということです。ラウンドテーブルというものをずっと続けてきました。これは非常に大きい。これをずっと積み重ねることによって、ヨーロッパ間が非常に強い信頼というものが生まれていくということがあります。

この問題を考える際に、私はよく言うのは、カントという人の哲学です。カントは恒久平和、絶対永久平和というのを説いた人ですけど、カントは、理念は二重になっていると主張しています。ここに書きましたように統整的理念と構成的理念というものです。統整的理念というのは何かというと、これは人間がどうやっても恐らくはつかむことのできない

何か普遍的な命題のことです。例えば絶対平和ってこれにあたります。恐らく残念ながら人間は不完全な動物である限り絶対平和社会、あらゆる暴力のない社会を生きることにはできないでしょう。こういうものが統整的理念です。それでもなお絶対平和が重要だ、というふうに言うのが統整的理念ですね。構成的理念というのは、これは実現可能な理念です。例えば児童手当をいくらにしましょうとか、軍事費をいくらに下げましょうというのは、これは現実的な理念ですよ。つまり統整的理念というのは、人間が実現不可能な命題であり、構成的理念というのは実現可能な命題である、というのが二つの理念の区別です。カントは何と言ったかということ、この二つは両方がセットでなければ起動しないと云ってるんですね。どういうことかということ、統整的理念は、ネット用語で言えば、よく「お花畑」だというふうに言われたりします。例えば軍事力の無い社会、あるいは絶対的な平和社会、そんなものありえないだろうというふうに嘲笑されたり、意味がないとも言われたりします。しかしカントは、意味が絶対あるんだと言います。なぜかということ、この統整的理念というものを掲げて、そしてみんなであそこに向かって行こうよというふうに、到達点みたいなものをみんなで見据えて歩いていくからこそ、じゃあ軍事費いくらに削減しましょうとか、核は何%減らしましょうとかという具体的な構成的理念が成立するんだと。この具体的な構成的理念が成立するためには、普遍的な統整的理念が成立していないといけない。この理念の二重性というものを忘れてはならない、とカントは言っています。

私はこれが非常に重要だと思うんです。なんでEUが成功したかということ統整的理念としての連邦国家を掲げたからです。そして、一つになりましょうよ、ヨーロッパとして、というように、あの星を目指そうというようにしたからこそ国境警備減らしましょうとか、人の移動についても自由にしましょうとか、通貨も統合しましょうとか、一步が踏み出せたわけです。私は、こういうものが理念というものに在り方だと思っています。ですからアジア、特に東アジア共同体というものがお花畑だ、かつて鳩山さんなんか、そのように言われましたけど、し

かしそうじゃないんです。それが重要なこれからの命題だと掲げることによって、中国や韓国やいろんな諸国と、じゃあ、この問題どうしようか、あの問題どうしようかという一歩が踏み出せるわけです。この関係性というのが非常に重要で、ヨーロッパはこれを一つひとつやってきた。ここに私は、ヨーロッパから学ぶべき非常に重要なポイントがあるんじゃないかと思っています。

## ～ ASIA IS ONE と「アジア主義」～ 宗教、民族の違いを乗り越えて

そして最後ですけど、EUが強かった理由は、大文字のヨーロッパというのが存在しているからだとは私は考えてきました。つまり、ヨーロッパ人たちは1,000年にもわたって、ルネサンスの頃からずっと、ヨーロッパって何なのかということを考えて続けてきたんです。哲学的にも美学的にも芸術の世界でもあらゆる所でヨーロッパって一体何なのかということを考えて続けてきました。その中核にはキリスト教というものがあります。では、アジアにこれが果たしてあるのか。私は一つ目は努力するべきだと思います。しかし、二つ目が、なかなか難しい。アジアという概念は非常に新しい概念です。西洋に対して東洋という概念が生まれてくることになりました。ですから、アジアという一つ政治的な意味を持った、一つの空間としての概念というのは歴史上さかのぼっても100数十年ということになるでしょう。ですからヨーロッパという大文字のものが成立しているところとはかなり歴史が違います。そして宗教的にも違います。ヨーロッパには背骨がありました。それがキリスト教です。しかし、アジアはさまざまな宗教がある所です。仏教・イスラム教あるいはキリスト教もあります。そしてヒンドゥー教はインドの中心的な宗教です。儒教も中国では大きな意味を占めている。なので、宗教的にはバラバラだと言ってもいい状態です。

こういうところをアジアとして、どういうふうに定義するのかというのが、実は非常に難しい問題なんです。しかし、私はそれが全く根拠のないものなのかというと、それは違うというのが、最後に申

し上げたいことです。私が学者としてやらなければいけないと思っている中心的なテーマはここにあります。『アジア主義』という本を書きました。日本はこのアジア主義を掲げて、そして侵略をしていったという歴史がありました。しかし、このアジア主義というものを戦後、侵略思想だということで全部黒塗りにしてきたんですけど、私はそれでよかったのかというふうに思うところがあります。むしろこのアジアの連帯という考え方の中に表れてきた非常に重要な、東洋って何なのか、アジアって一体何なのかを問うた哲学者・思想家たちの英知というものは、私は今でこそ輝く意味を持っているんじゃないのかなと思っています。

例えば岡倉天心という人です。岡倉は『東洋の理想』という本の冒頭で、アジアは一つである、彼はこれを英語で「ASIA IS ONE」というふうに書いています。しかし、東洋の理想のこの話は、そのあと、ASIA IS ONEと言いながらアジアはバラバラだという話になっていきます。中国は儒教の国であり、孔子・孟子の国である。しかし、インドに行くとはこれはヒンドゥー教のヴェーダーンタの国であると。アジアの二大国の間では何か全然違う風景が広がっている。この違いを象徴するように高いヒマラヤ山脈が両国の間にそびえている、アジアはバラバラであるって言うんですね。しかし岡倉はまたひっくり返すんです。それでもアジアは一つである、それは何においてかということ、彼は存在論・認識論のレベルにおいてアジアは一つである、と言います。じゃあ、どういう存在論・認識論なのかということ、彼はアドヴァイタ（不二一元）という考え方であると言うんですね。アジア人たちは見かけ上の〇〇教を超えた認識論や存在論を共有してきた、それが不二一元なのだと。一なるものは他であり、他なるものは一である。仏教的に言うならば、他即一、一即他という考え方です。私はこれを対立論というふうに呼んでいますけれども、ガンディーはこのことを山登りに例えました。山というのは、例えば富士山で言えば、富士山の頂上は一つであると。しかし、登り道は複数あるわけです。山梨側から登る、静岡側から登る、いろんな道があります。この登り道の違いというのが宗教の違いである。そしてこの頂、

山の頂上が真理である、真理は一つであると。それはそうですね、真理が三つも四つもあれば、真理自体の命題に反します。真理は一つでなければいけません。しかし、真理に至る道は複数存在するというふうにガンディーは言いました。例えばヒンドゥー教の道を辿って頂上に行こうとする人も、イスラムの道を辿る人も、仏教の道を辿ろうとする人も。しかし、最後に到達するものというのは、真理という一つの地点である。つまり、ガンディーは、真理の唯一性を認めると共に真理に至る道の複数性を認めるというふうに言ったんですね。なんでみんな宗教の違いによって戦うのか。それは道の違いに過ぎない。山梨から登るのが正しい、静岡から登るのが正しい、それに何の意味があるのか。道が最終的に至るその一つのところを見つめよ、しかし、その真理というのは所有できない。なぜならば、人間が有限なる動物だからです。真理は逆に無限なる存在である。無限なる存在を有限なる存在は正確に把握することができない。永遠に求め続ける一点として存在はしている、その道の違いによって何か争っても意味がないというのが、ガンディーの言い分でした。これが不二一元ですね。

一なる真理というのは多元的に表れる、多元的に表れているその真理というものは一つのものである。色即是空、空即是色もそうです。この、ある種の弁証法的な観念というものがアジアの認識論なり存在論である。これにおいて「ASIA IS ONE」、アジアは一つである、これが近代ヨーロッパの認識論と大きく違うところである、というのが

岡倉天心の言ってきたことでした。私は、西田幾多郎も同様だと思いますし、孫文だって同じだと思いますけど、こういうようなアジア思想というものをもう一度私たちの時代にどのように定義し直すのかという、非常に長い思想的な態度というのが求められてるんじゃないかと思います。私は直ぐにアジアが一つの、何か連邦国家のようになるとは思いません。しかし、そういう理念を掲げることによって一つ一つクリアしていったときに、日本と中国、日本と韓国が戦争に至るというような関係性を全く想起しなくてもいいような状況を、今のドイツとフランスのような穏やかな関係というものが生まれてくれば、それは日本にとって非常に有益な国際秩序の一つである、それが私はアジアの連帯というものであると思っています。私は何か理想状態に人間が到達するとは全く思っていないから、この中途半端な過程をずっと永遠に紡いでいくことによって、ある種の幸福な社会というものが持続的に継承されていく。そのことを考えたい。これがリベラル保守という立場から見たアジアの連帯という問題。そして最初に戻りますけれども、このII番のゾーンですね。しっかりと、ここはもう野党側に付くしかないんです。自民党はもう明らかにIV番のネオコン政党ですから。このII番のゾーンをどういうふうに創っていき、安定的な将来というもののビジョンを創っていくのか。これが私自身が考えている、「リベラル保守の可能性」という問題でした。時間がきましたので以上にしたいと思います。ご清聴ありがとうございました。



---

(以下、質疑応答)

**司会** 中島先生ありがとうございました。この会場は3時半までお借りしていますので、何点か質問を受ける余裕があります。せっかくの機会ですから質問等ある方はぜひ挙手をしていただいて、すみません、お名前をおっしゃっていただいた上で質問をしていただきますようお願いしたいと思います。どなたか、はい、どうぞ。

**会場** 高知市の田中といいます。一つは、まず感想です。何か日蓮を彷彿とさせるようなお話ありがとうございました。それで質問ですが、昨年の秋だったと思うんですけども、先生がネット上で、山本太郎と枝野代表がセットになったら何か面白いことが起きるんじゃないかみたいなことを発言されていたような、そういう記事を読んだ記憶があるんです。その辺のこと、もうちょっと詳しく話していただきたい。もう一つあります。私全然知らなかったんですけど、中江兆民に対して、かなり高く評価されているっていうようなことを聞いたもので、その辺りもお答えしていただけたらありがたいですが。

**中島氏** はい、分かりました。れいわ新選組の問題、そして山本太郎の問題ですね。2017年の立憲民主党の結党以降、日本で何が起きているのかというと、私はラディカル・デモクラシーの出現だと捉えてきたんですね。これは、政治学者たちがこの10年ぐらい盛んに論じてきたことなんですが、先進国で共通している問題があります。それは何かというと、低投票率という問題なんです。みんな選挙に行かなくなっているという問題が、1980年代以降ずっと先進国で続いてきました。何でそうなってきたのかというと、一つは新自由主義の問題。もう一つは、二大政党と小選挙区制の問題であるというのが、よく言われてきたことです。新自由主義というのは、官から民へということで、行政がやる仕事、政治がやる仕事を小さくしていつてマーケット、市場に任せていこうという考え方であり、1980年代のイギリス、アメリカがトップを切ってやっていた、小さな政府路線でした。この小さな政府路線、新自由主義を取っていくとどうなるかということ、政治のやるべき仕事が小さくなっていくんですね。全部マーケットに任せていけばいいという考えですから、政治がやる仕事というのは、ドンドンと小さくなっていきます。そうすると、政治によって何かを変えようという有権者の意欲が削がれていきます。つまり、どの政治家に投票したって大差はなくて、政策はマーケットによって決定されていると。福祉政策だってこれ以上大きくならず、むしろドンドン小さくなっていく、だから自己責任であると。そうすると、投票に行っても意味ないし変わらないという感覚が席卷し始めて、新自由主義の社会が進行すれば、主権の外部化という問題が起きてきます。私たちは主権者であると言われてるものの本当に主権者なのか、数年に1回投票に行くものの、そんなことだけで世の中変わりやしないし、そして自分の応援している政党が勝利しても、何も世の中は変わりはしない。結局、私たちは主権者でありながら主権から疎外されているという感覚を非常に強く持ち始めるんですね。これがコリン・クラウチという人が言った「ポスト・

---

デモクラシーという時代」なんです。私たちはデモクラシーの時代に生きていながら、デモクラシーがドンドン外部化されていくという、そういう感覚を持った社会。これが続いていく。

さらにそれが二大政党制、そして小選挙区制になるとどうなるか。小選挙区制というのは、とにかく1人しか当選しませんから、そこから立候補すると政治家はどうなるかという、マジョリティの票を取りにいくわけです。マイノリティの人の声を聞いたって票にならないわけですから。だとすると、2人が立候補したとすると、この2人が大体同じことを言い始めるんです。なぜならば、一番たくさんいるゾーンが票の最大のゾーンですから、そこを取りにいくために二大政党は限りなく接近していきます。その結果、国民としては選択肢が無くなっていくんです。どっちになっても一緒じゃんという状況になっていき、より一層、低投票率になっていく。つまり、ポスト・デモクラシーという時代には、デモクラシーの中に生きながら私たちは主権者として疎外されているという状況が生まれていく。デモクラシー自体が死滅していくわけです。これにどう歯止めをかけるのかというのが、政治学の中でずっと言われてきたことで、そのときにラディカル・デモクラシーっていう議論がされてきました。急進的なデモクラシー、という意味ですけど、これはどういう考え方かという、投票以外にもデモクラシーってありえる、という考え方です。一番有力なのは熟議デモクラシーという考え方です。これは地方行政なんかでは可能ですね。東京では世田谷区長の保坂展人さんなんかがこれを取り入れていますけど、タウンミーティングとか車座集会とかを頻回行って、選挙以外でも住民の声を直接的に地方行政に反映するようなシステムを導入していく。そしてそれを、言いつばなしではなくて、そこに参加した有権者たちもしっかりと他者と合意形成しながら議論をし、その中から出てきたニーズというものを地方行政が担っていくという、こういうような熟議、議論によってさまざまな形で行政を変えていくというのが熟議デモクラシーっていうもので、これは一つの重要なポイントとしてこのラディカル・デモクラシーの中核に位置付けられてきました。

もう一つが、闘技デモクラシーというものです。これはシャンタル・ムフという人が中心的に言っているんですが、どういうことかという、やっぱり重要なのは敵をしっかりと想定して、何か絶対に違う、彼女は「境界線」という言い方をしてますけど、しっかりとした境界線を引いて、あいつらがおかしい、この政治はやっぱり絶対に変えないといけないというふうに非常に強い形で闘いを挑んでいく。そしてそのことによって多くの人たちの情動を喚起し、それを政治的な支持につなげていくような闘いのデモクラシーが必要である、というのがシャンタル・ムフが言っていることです。熟議デモクラシーというのは普遍的な命題なんですけど、闘技デモクラシーの方は、ヨーロッパとかアメリカで生まれてきた一つのポピュリズム現象でした。20世紀後半からのポピュリズムの多くは右派になっていたんですけども、近年、この10年ほどの傾向は、いわゆる左派ポピュリズムがドンドン欧米社会の中で大きくなっているというのが政治学者の見方でした。これはジェレミー・コービンとかバーニー・サンダースの現象です。民衆の貧困というものに対して本当に怒りの声を上げ、そしてあいつらが悪いんだというふうに、ウォールストリートの名指ししながら闘いを挑んでいく。そうやって多くの人たちの情動を喚起し、政治的なパイを奪っていくという運動です。こういうポピュ

---

---

リズムが、左派の側から生まれてきた。

ポピュリズムというのは、実は政治学では全く悪い言葉ではないんです。ポピュリズムって、どうしても日本語では大衆迎合と訳されるんですけど、これは人民主義ですよ。つまり「私たちこそが主権者であって、お前たちだけで政治やるなよ」という声が基本的なポピュリズムの概念です。俺たちこそが主権者なんだから俺たちの言い分を聞け、というポピュリズムが左派の側から現れてきたのがコービンやサンダースの現象であった。そういうものが日本の中で生まれてくるのかというのが、近年の政治学者たちの話題だったんですね。多くの学者たちは生まれてこないだろう、日本にはそういう土壤がないという議論だったんですが、出てきたんですね。それが山本太郎という人なんだろうと思います。前者の熟議デモクラシーというのは、私は枝野さんが火をつけた、日本における新しいデモクラシーの像だったと思います。「枝野立て」という声に彼は反応して、そして立つわけです。立憲民主党はあなたですって言ったときに、ラディカルに繋がっていく。私の気持ちを分かってくれてるのね、というような、その繋がりでですね。これがラディカルに起動したのは立憲民主党が最初だったんだと思いますし、彼が動かしたのは熟議デモクラシーでした。そのあとパートナーズっていうものを作り、そしてそれは昔の党員とは違うんです、政治的なパートナーなんです、対等なパートナーである。ボトムアップで、そこから意見を集約して政治に生かす、あなたと私、みんなが立憲民主党なんだという提起だったわけです。

しかし、このラディカル・デモクラシーは、ある瞬間にシュッとしぼんでしまう可能性があります。それは、距離ができたときです。つまりラディカル・デモクラシーは、自分の考えが直接的に政治に反映されるというラディカルさが非常に重要なんですけれども、何が問題になるかというところが永田町の論理です。永田町の政治家だけでやっていて、私たちの声が届いていないよねとなったときに、ラディカル・デモクラシーは一気に終息していく。しぼんでいくというのが特徴なんです。なぜ今、立憲民主党に支持が集まらなくなっているかというところが、永田町の論理が、国民民主党との勢力争いとかで見えちゃうからです。ああいうのが見えれば見えるほど枝野さんは自分の首を絞めるんです。私はこれが立憲民主党の失敗、ラディカル・デモクラシーをつかみ損ねているという問題だと思います。そこに横から別のラディカルデモクラシーを起動させたのが山本太郎という人ですね。これは闘技デモクラシーだと思います。しかし闘技デモクラシーはポピュリズムを伴っていますから危ないところがあります。なので、熟議デモクラシーと闘技デモクラシーがどういうふうにバランスを取りながら両立して、ポスト・デモクラシーの時代に新たな主権の問題を提起できるのかというのが、ビジョンとして非常に重要なんです。だからこの二つが手を組むべきだというのが私の考えで、今のところ闘技デモクラシーの旗を取ったのが山本太郎でしょうね。熟議デモクラシーの方の、一応政党としての数を持っているのは枝野幸男という人。だとするならば、やっぱりここは手を結ばないといけないというのが私の考えであり、昔、田中角栄と大平正芳が盟友だったように、そういう関係性が野党の中でどう生まれるのかがこれからのポイント。後は、それを誰が担うのかですね。一方はもう山本太郎が取ったのは間違いないでしょう。この熟議デモクラシーの雄を誰が取るのが次の政局なんじゃないのかなと思っています。

---

---

中江兆民に関して言えば、大変バランスのとれた、日本のリベラルな保守の元祖だと私は思っているんです。かつ、彼自身は非常に庶民的な英知を重視した人ですね。僕はそこが非常に好きで、保守っていうとかなりエリート中心的な考えの言葉が多いんですけども、兆民という人は非常にこう庶民的な感覚を重視した、私にとってはリベラルな保守でありバランスのとれた人で、明治期の重要な良識のエッセンスだったなあと思っています。中江兆民さんの生まれた所も何度も行きましたが、まあ高知の町って面白いですね。上土と郷土の街で全然違うなというのがよく分かりました。兆民の苦勞もそこに行ってよく分かったような感じがしました。

**司会** はい、ではその後ろの方どうぞ。

**会場** 外京と申します。私ヨガをやった関係で、インドの思想の、自分の内側に大なる宇宙があるみたいな考え方にすごく親しんできたんですけど、先生もインドに長く滞在された、それと最初の旅行がイランだったというところが、どういう繋がりかなというのを不思議に思いましたので、よかったら教えてください。

**中島氏** 僕は大学時代インドの言語のヒンディー語っていうのを勉強して、それで20代でインドで3年半生活して、インドの政治の現象を調べていました。ですから、インドは実は1980年代以降なんですけど、BJP（インド人民党）というのが今の政権与党なんですけど、いわゆるヒンドゥー原理主義が席卷している所なんです。お隣のイスラム諸国ともめていて、インドで数々のテロが繰り返し起きました。私はなんでインドがIT大国と言われ、経済成長もする中で右傾化現象を辿るのかに関心があってインドに行き、そしてその中核団体であるRSS（民族奉仕団）という団体があるんですけど、その宗教イデオロギーと政治イデオロギーというものを接点として持っている団体の中に入って、フィールドワークをしました。だからインドのアシュラム（僧院。ヨガを学ぶ学校、あるいは施設）と言われる所で、彼らとずっと共同生活をしながら調査するというのを、20代の時にやっていました。それがインドに行く大きな目的だったんです。その前に、私のお世話になっていたイラン人の先生がいて、その人が帰国して、一度きてくださいと言ってくれたので、たまたまイランに行ってみたのです。やはり、これからこういうナショナリズムや原理主義の問題を考える際には、行けるときにイランに行つとかなんといけないと思って、始めてテヘランに降り立ったら心寂しくなったというのがその時の話なんですけど。その後が面白くて、次の日の朝、ホテルで朝を迎えて、おっかない国だろうと思って外に出たら、イランってものすごく楽しい国だったんですね。非常にきれいな国で、人々は親切ですし、90年代の前半ぐらいまではイラン人の不法滞在者が日本にはたくさんいましたから、テヘラン市内を歩いていると、やたらと日本語で声を掛けられるんですね。面白かったですね。「僕、強制送還」とか言うんですよ。「2回強制送還」とか言いながら、あるいはNHKのドラマの「おしん」が視聴率90%を超えている国なので、当然「おしん」のことを知ってるし、あるいは中田とかカズとかサッカーが非常に好きな人たちなので、そんなことで声を掛けてもらいながらイランのことを大好きになって帰ってきました。

---

**司会** はい、ありがとうございます。あとお一人だけ、はい、じゃあ前の方、どうぞ。

**会場** 岡林といいます。二つ質問がありまして、先ほど、アジア極東地域においてEUのような、国の共同体のようなものを構想できるのではないかというお話だったんですけど、EUは中小国の連合ということで、中小国だからEUを使わなければやっていけないということだったんですけど、アジアの場合では中国という近年ものすごく大きくなってきた国がある中で、果たしてその中国が、中国単体でやっているから連合体に乗る必要はないぞということで、連合体を形成するインセンティブというものが果たしてあるのかということが一つ。もう一つは、アジアの共同体を作るという時に、日本がかつて戦前に八紘一宇だったり大東亜共栄圏ということで近隣諸国に侵攻していったということもあるし、歴史的背景なので日本がアジアの連帯ということを唱え始めると、近隣諸国はそういったトラウマを感じてしまう側面がどうしてもあると思うんですけど、そういったトラウマを克服する道というのは、どういったものがあるのかについて質問をしたいと思います。

**中島氏** 中国のインセンティブですけど、実は今の中国は、明らかにアジア主義を取っているんです。一帯一路というのは、明らかにアジアと共に中国はあるという考え方です。しかもアジアの中心は自分たちであるという、アジア民主論というのが一帯一路の考え方です。なので、私が思うに、中国に対して日本が言うべきことというのは、アジアが連帯しようというのは中国の言い分どおりであると。しかし、あなたたちは何故に日本が犯した過ちを辿ろうとしているのかということ、ちゃんとやらないといけないですね。つまり中国の覇権主義に、この一帯一路というのは背中合わせの問題であるわけです。それは中国自身が、日本の戦前の歩みに対して批判をしてきた、その歩み自体を自分たちで歩み直そうとしていることではないのかと。私は、「中国の大日本帝国化」という言い方をしていますけど、私は両方とも批判的なんです。しかし、そういうような覇権主義を超えてアジアが連帯するというビジョンをどう持てるのか。それが中国の国益になるとするならば中国にとっては、これはインセンティブがあると。逆に、周りは小国と中小国ですから、ここが連合体を作って、強い力を持って中国を友好的に封じ込む戦略をどう取れるのかというのが、アジアの共同性というものの重要なポイントだろうと思います。二つ目の質問は、日本の歴史認識の問題ですね。私がアジアに行き思うのは、日本人はやはり圧倒的に歴史に対する知識が欠け過ぎていると思います。竹島問題にしても、あるいは尖閣の問題にしても、いろんな人に聞いても、ちゃんとした筋道を言える人に私はほとんど会ったことがないですね。日清戦争は何で始まったのかすら、ほとんどの日本人は言えないんじゃないでしょうか。これでは、アジアの中ではちょっと生きていけないと思います。ですので、日本とアジアとの関係というのは、近隣諸国からするとどういふふうに見えるかという、日本人はなんであんなに歴史を知らないのに中国と韓国が悪いと言ってるのかと。全然知らないのに何であんな一方的なことが言えるんだらう、気持ち悪いっていう感覚があるんですね。中国や韓国の人はかなり習ってますから、まあもちろん中国的な、あるいは韓国的な歴史観ですけども、しかしファクトは押さえていますから、やはり歴史に対する雲泥の

---

---

歩みの格差があるんですね。これを埋めないとどうしようもないです。ここをどうやっていけばいいのかというのは、教育とかを含めて総合的にこれから日本はちゃんと考えないといけない問題だと思っています。

**司会** はい、もう一人いけそうですね。あの、手を挙げた後ろの方、簡潔にすみません、お願いします。

**会場** はい、質問は新保守主義という言葉の意味を教えてくださいたいです。今の安倍政権の分析の中で新保守主義という言葉をよく聞くんですが、イマイチ理由が分からない。新自由主義の中で市場主導をやって、バラバラになる集団をナショナリズムなどでまとめるのが新保守主義という説明であったり、あるいは新保守主義イコール新自由主義だというような説明があったりで、そもそもの保守と言う言葉から考えると、この新保守主義というのはどういう意味なのかを教えてくださいたいです。

**中島氏** 新保守主義というのは、もともとネオコンサバティブの訳です。日本では、新保守主義と言った瞬間にネオコンサバティブとは全く違う文脈で捉えられたり、中曽根内閣が新保守主義と言われたりしたんですけど、それは欧米の政治哲学からはかなりずれてしまうので、ネオコンサバティブっていうのとネオリベラリズムっていうものの違いとして捉えた方が、世界標準としては正確だろうと思います。私が示した図でいうとネオコンサバティブっていうのがIV番ですね。ネオリベラリズムと言われるものがIII番です。ネオリベラリズムというのは、あくまでも小さな政府、自由競争なんだけれども価値の問題についてはリベラルだという考え方を取っている。ですから、選択的夫婦別姓なんかOKですよ、それは個人の自由ですよ、ただし、さまざまなリスクに対しても個人で対応してくださいねっていうのがネオリベラリズム、新自由主義です。それに対してネオコンって言われるネオコンサバティブ、新保守主義は、小さな政府かつパターンリズムなんです。つまり、自己責任型でありながらさまざまな価値については、権力を持った人間が介入し、こうあるべきだと主張するという考え方です。ですから、息子ブッシュ政権のアメリカなんていうのはこういうような考え方が非常に強かったと思います。そして私自身はそういう世界的な文脈で捉えるならば、安倍内閣は、はっきりとしたネオコンサバティブと言われるゾーンなんだろうと思っています。それに対して、リベラルコンサバティブっていうのが、全く逆のII番のゾーンであろうというのが私の定義です。

**司会** ありがとうございます。以上で質疑も終わっていきたいと思います。約2時間、ずっとお話しいただいた中島教授に全体の拍手でお礼に代えたいと思います。どうもありがとうございました。

(終)

公益社団法人 高知県自治研究センター  
〒780-0862 高知市鷹匠町 2 丁目 5-47 TEL088-822-6460